

- 1979), p. xvii.
- (7) *Ibid.*, p. xviii.
- (8) *Ibid.*
- (9) Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (London: The Hogarth Press, 1929), p. 42.
- (10) Rachel Bowlby, *Virginia Woolf: Feminist Destinations* (Oxford: Basil Blackwell, 1988), pp. 38–39.
- (11) *Ibid.*, p. 39.
- (12) *A Room of One's Own*, p. 31.
- (13) *Three Guineas* で用いられる “I” の匿名性と “I”, “we”, “you” の用い方に反映される差異の概念については、拙論「*Three Guineas* における差異の力学」(『コルヌコピア』創刊号, 1990年)の中で論じた。
- (14) *Three Guineas*, p. 188 参照。
- (15) Introduction to *Three Guineas* by Hermione Lee, p. xvi.
- (16) *Ibid.*, p. xvii.
- (17) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1977), p. 295.
- (18) Introduction to *Three Guineas* by Hermione Lee, p. xv.
- (19) From Julia Kristeva, *About Chinese Women* (translated by Seán Hand) in *The Kristeva Reader* edited by Toril Moi (Oxford: Basil Blackwell, 1986), p. 156.

流れの中の一点として相対的に捉えたがゆえに今日なお価値を持つのである。*Three Guineas*が実現しているのは、眼前の現実には呑み込まれず、同時にそこから顔をそむけない姿勢、しかもはるか先に視線を投げかけながら同時にその幻に見惚れない姿勢である。そしてその実現のためにとられたのが、客観的真理の形も、独善的“manifesto”の形も、ユートピアのファンタジーも否定した挑発的な言説なのである。

男女共学が当然のこととなり、女性の職場進出が目ざましいとよく言われる。そんな時代にあって *Three Guineas* が扱った教育・就労の問題は随分様相が異なるように見えるかもしれない。しかしそうした変化にもかかわらず、イデオロギーの面ではこの作品が行なう挑発をもはや必要としないと言えるほど人々は変わっていないのではないだろうか。それゆえ表層での問題の変化に囚われなければ、この作品が訴える視点の移動という知的作業は、個々人が社会の権力作用に眼を開いておくために、そして社会自体に柔軟性を与えるために、今日も必要であることは間違いない。

注

- (1) Norman Fairclough, *Language and Power* (London: Longman, 1989), p. 233. なお、以後にイデオロギーという語を用いる際には、Faircloughと同様の用法、即ち常識化されて人々に受け入れられた思想という意味で用いる。
- (2) Virginia Woolf, *Three Guineas*, new paperback edition with Introduction by Hermione Lee (London: The Hogarth Press, 1986), p. 11. 以下、このテキストからの引用は本文中にページ数を示す。
- (3) Joseph Conrad, *Heart of Darkness* (New York: W.W.Norton, 1971), p. 12.
- (4) George Steiner, *Antigones* (Oxford: Clarendon Press, 1984) 参照。
- (5) Quentin Bell, *Virginia Woolf; A Biography* vol. II (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1972), p. 205.
- (6) Nigel Nicolson (ed.), *The Sickle Side of the Moon: The Letters of Virginia Woolf, vol. V : 1932–1935* (London: The Hogarth Press,

未来に対する危機感と希望の入り混じる思いをも表わしてはいないだろうか。

この作品とよく比較される *A Room of One's Own* は最後にユートピア的ヴィジョンを描き、そこに留まることができた。しかし *Three Guineas* ではユートピアの夢に留まることは不可能とされる。度々現実の声が夢の邪魔をし、スペイン戦争の写真が夢見る眼差しを遮るのは、現在（1938年）が「私」に夢を見続けることを許さない時代であること、夢が絶えず現実によって引き裂かれる時代であることを読者に認めさせるための手段なのである。さて現在（1991年）は私たちに如何ほどの夢を見させてくれるだろうか。

結 語

...let us on the contrary refuse all roles to summon this 'truth' situated outside time, a truth that is neither true nor false, that cannot be fitted in to the order of speech and social symbolism, that is an echo of our *jouissance*, of our mad words, of our pregnancies. But how can we do this? By listening; by recognizing the unspoken in all discourse, however Revolutionary, by emphasizing at each point whatever remains unsatisfied, repressed, new, eccentric, incomprehensible, that which disturbs the mutual understanding of the established powers.

恐らく *Three Guineas* が行なっているのは、この Julia Kristeva の言葉に表わされた危うい綱渡りの如き行動と同質のものであろう。安定した関係性から我が身を引き離し、正当とされる言説を解体し、絶えず自らの視点から歴史と社会を相対化すること、この *Three Guineas* の姿勢は Kristeva の言葉に受け継がれている。

Three Guineas は時局を大いに意識して書かれた。しかしこの作品は作者個人の反ファシズムの声明でもなく、フェミニストとしての戦略の具体的な提言でもない。この作品は、過去を点検し、現在を過去から未来への

The aim of the new college, the cheap college, should be not to segregate and specialize, but to combine. It should explore the ways in which mind and body can be made to cooperate; discover what new combinations make good wholes in human life. (p. 40)

新しい大学は既成の学問領域の枠を排して、精神と肉体の統合、断片的な生の現象を包括すべき多様なヴィジョンを探求すべきだというのである。この探求は Woolf をはじめモダニストの作家たちが志向したものに通じる。さらに、研究領域の専門化、科学と倫理の乗離、研究の産業社会への隷属が進んだ現状を思えば、この反大学的大学観は今日の私たちにとっても絵空事として一笑に付されるべきものではないはずだ。

このような点から、*Three Guineas* が打ち出す様々な構想は既存の社会制度に異なった視点を投入するものとして機能していると考えられるのであって、現実味のない夢として読まれるべきではない。

事実、そんな構想が現段階で夢にすぎないことはテキストに明示されているのである。夢見る「私」に対して現実の声がこう語りかける——“Dream your own dreams...but we have to face realities” (p. 41)。ここでの「現実」とは、女性が大学教育を受けようとするのは専門職に就くためであり、そのためには既成の大学教育との妥協——学位取得、競争、専門化——は避けられないというものである。それゆえ一枚目のギニー金貨は「私」の夢見る大学の実現を条件とせず渡される。即ち夢よりも現実での改善が優先されるのである。ただしその方策が妥協であるには違いなく、“lame and depressing answer” (p. 42) であることが確認されてもいるのだが。

語り手の「私」が夢見ることは何度かある。しかしその度に現実の声が彼女を実社会のレベルへと引き戻す。この作品はユートピアの幻想に逃避しているものではない。精神が絶えず夢から引き戻されざるを得ない現実の厳しい状況が確認され、精神が夢と現実の間を往来するその運動の軌跡が「私」の思考過程の一部をなす。現実と夢との間の往来は現実を異化し読者に現実を再認識させるための手段でもあり、その点で挑発的言説としての性格を表わすものでもある。しかしそれは同時に、現在に対する幻滅、

argued tenets of current feminism. But such proposals are mixed with airier visions of a college where 'the arts of human intercourse' are taught, or of women dancing in a ring around the bonfire of 'old hypocrisies'.⁽¹⁸⁾

Lee の読みは “disconcertingly” という語にも現れているように、区別の曖昧さを欠点と見なしているようだが、それではひとつ，“the pragmatic” と “the visionary” の間を揺れ動いている部分について考えてみよう。

第1部の終わりに、Lee の引用にも触れられている女性のための大学では何を教えるべきかが列挙してある。

It should teach the arts of human intercourse; the art of understanding other people's lives and minds, and the little arts of talk, of dress, of cookery that are allied with them. (p. 40)

確かにここに並んでいるのは常識的に見て大学教育にふさわしからぬ科目である。しかし作者が本気でこれらの科目を実践しようと提案しているのか考えてみる必要がある。というのも、この部分は既成の大学教育に対する幻滅を動機としているからだ。「人間関係を築く技術」、「他者の生き方や心を理解する技術」は既存の学問領域で等閑にされている人と人との（そして各国間の）コミュニケーションと他者性の尊重を言い換えたものであり、「会話と服装の技術」も女性のたわいない趣味に仮託して、言語と衣服というコミュニケーションのための2つの記号の重要性を示唆する。「料理の技術」も、知識人階級の男性がその実生活を料理人と女中たちに依存していることに対して作品の中で皮肉が向けられていることを考慮すれば戯言ではない。この教育観は、“Not the arts of dominating other people; not the arts of ruling, of killing, of acquiring land and capital” (p. 39) というふうに、帝国主義と父権制社会の権力の増大に貢献する教育を否定する立場から生まれている。

forward for our consideration. There are three of them. The first is to sign a letter to the newspapers; the second is to join a certain society; the third is to subscribe to its funds. Nothing on the face of it could sound simpler. To scribble a name on a sheet of paper is easy; to attend a meeting where pacific opinions are more or less rhetorically reiterated to people who already believe in them is also easy; and to write a cheque in support of those vaguely acceptable opinions, though not so easy, is a cheap way of quieting what may conveniently be called one's conscience. (p. 14)

同様の主義主張を持った者たちの集会で交わされる意見や，“manifesto”の言説の空疎さに眼をつぶり，それらに同意することによって安易な社会参加を行なうことは，“outsider”の立場に身を置き，独自の視点を保つことよりずっとたやすいし，自己満足も得やすいかもしれない。だが，それで安心するのではなく，絶えず違った角度から物事を見るという困難な作業を怠ってはならない，個人の視点，女性としての視点が既成の言説に呑み込まれてはならないというのが，このテキストが一貫して主張することである。それゆえ，Showalterの指摘する「空疎さ」は他の言説の空疎さの反映であって，このテキストの本質ではないと考えられるのである。

さて，*Three Guineas*が“manifesto”という形式も性格も拒むのは今見てきた通りだ。

それならば“utopian meditation”と呼ぶのがふさわしいだろうか。Leeによれば*Three Guineas*では現実と夢の区別が曖昧であるとされる。

There are, disconcertingly, no tidy distinctions between facts and dreams.... A number of revolutionary alternatives to the established social forms are proposed, but these oscillate, without much change of tone, between the pragmatic and the visionary. That women should be paid for housework, or share the rearing of children with their husbands... have become established and much-

て現れるのは、男性である“you”が「私」に署名を求めてきた“manifesto”の中にある表現としてである (p.98)。即ちこれは、権力の内側にいる者としての“you”が用いる「正当な」言説として使われているのである。だから「私」がこの表現を繰り返し用いるのは“you”が用いた言葉を“you”に合わせて借用しているに過ぎない。

Three Guineas は、そのような巷に氾濫する常套句、スローガンをむしろ異化するのである。「文化」とは誰の「文化」なのか。「知的自由」とは何からの、そして誰にとっての自由か。無批判に多数が同意を示すはずの宣言文の表現にこのような疑問を発し、“paid-for culture/unpaid-for culture” (p.104), “adulterated forms of culture” (p.108), “prostituted culture” (p.115) といった挑発的な表現によって既成の文化についての概念を解体する。そして、「『私たちの』文化と『私たちの』知的自由を守ることによってしか文化と知的自由を守る上で貴方に力を貸すことはできない」(p.102) というふうに「文化」に対して異なる視点を投入するのである。

ちなみに、“manifesto”に関しては、後注でそのような言説の氾濫に対して皮肉な眼が向けられている。

It is to be hoped that some methodical person has made a collection of the various manifestos and questionnaires issued broadcast during the years 1936–7. Private people of no political training were invited to sign appeals asking their own and foreign governments to change their policy; artists were asked to fill up forms stating the proper relations of the artist to the State, to religion, to morality (p. 191)

ここでは署名という政治活動に対して懐疑的な態度が取られている。この態度の是非については意見が分かれようが、このように懐疑的な立場を取る根拠はテキストの中に明らかにされている。

Let us concentrate upon the practical suggestions which you bring

the connection was not willingly perceived.⁽¹⁵⁾

視点の移動に対する無理解が客観性に欠けているという批判を産む。Nicolson の批判は、逆に彼自身の知的硬直を曝け出す結果となっているのである。

第3章 夢と幻滅の狭間で

Hermione Lee によれば、“For all its anger and practical energy *Three Guineas* is a utopian meditation, not a manifesto”⁽¹⁶⁾ということになる。しかしまた Elaine Showalter にとってこの作品は“empty sloganeering and cliché”を繰り返し、誇張、修辞疑問、反復に満ちている。⁽¹⁷⁾*Three Guineas* が“manifesto”か“utopian meditation”かという分類をする必要があるのかどうか疑問だが、これらの指摘を念頭に置きながら、最終的な評価に至るためにこれまで論じてきた言説の性質をまとめてみたい。

Three Guineas の言説が挑発を戦略とし、覚醒を促す過程としてある、ということは、それが理路整然とした秩序を拒むことでもあった。「私」の思考過程の中で、疑問は疑問を呼び、思考は度々出発点に立ち戻る。しかしそれは Nicolson の言う論理性の欠如として、また Showalter の言う皮相な文体上の技巧や繰り返しの多さとして批判されるべきものではない。視点の移動のための力を得るには、度々出発点に戻って移動が必要であることを確認しなければならない。第1部の教育の問題にせよ、第2部の就労の問題にせよ、また第3部の政治参加の形態の問題にせよ、常識的な見方とは異った角度から検討するためには、絶えず父権制社会の歴史的意義、その心理的影響について確認し、そこから疑問を発し直す必要があるのだ。

また Showalter の指摘する「空疎な標語的表現と常套句」の一例として恐らく考えられるだろう“to protect culture and intellectual liberty”のような表現は、確かに何度も繰り返し現れるが、それらは知識人が口にすべき標語として使われているのではない。そのような標語が飛び交い、繰り返し使われて意味が空疎になっている事態が十分意識された上で、意図的に用いられていると考えられる。そもそも上の表現が初め

反対する男性と独裁者という、一見つながりのないものを組み合わせ、それらが実は同じ意志によって結びついていると指摘するのである。

何の関係もなく別々に起こっているように見える現象が、実は連動していることに眼を向けさせる。それは読者の眼を現象の背後にある構造へと、そして自己の内に組み込まれ意識されなかったイデオロギーへと向けさせることである。

ただし挑発であるからには、全ての読者を説得するわけにはいかない。Nicolson の “her argument was weakened by inconsistency, incoherence” という嘆きにも現れたように、*Three Guineas* の論法によって説得されるのを断固拒否する読者の存在も当然予想されるのである。彼に “inconsistency” と見えるのは、「私」という語り手の思考過程に現れた現状への覚醒のレベルが一定でないことを理解しないゆえではなかろうか。この挑発的な言説は、語り手の抱く疑問、怒り、新たな角度からの答えの模索を繰り返して展開する。それは秩序立った論理的一貫性を拒否する言説なのである。また “incoherence” と見えるのは、*Three Guineas* を支えている視点へと自らの視点を移動しようとしないうえであろう。これはイデオロギーを正面から扱った言説の持つ限界或いは宿命と思われるのだが、客観性の欠如を理由にこの言説を批判するのは、的はずれであるばかりでなく、自らがイデオロギーにとらわれた人間であることを棚上げにした不誠実な態度と言わざるを得ない。その点で Hermione Lee の指摘は尤もである。

Nigel Nicolson, in his preface to Volume 5 of the *Letters*, perpetuates the most common response to the essay, which was, from its first appearance, a condescending resistance to its arguments, expressed in the form of anxiety about the author's coherence and mental stability. The essence of the feminist position—that the daughters do not belong to the same country as the fathers and brothers—is dismissed as absurd. The idea that the position of women in England, rather than the threat of Fascism in Europe, could be a major topic in 1938 was considered frivolous;

world, does not teach people to hate force, but to use it? Do they not prove that education, far from teaching the educated generosity and magnanimity, makes them on the contrary so anxious to keep their possessions, that 'grandeur and power' of which the poet speaks, in their own hands, that they will use not force but much subtler methods than force when they are asked to share them? And are not force and possessiveness very closely connected with war? (p. 35)

また女性の職場進出に反対する男性の新聞投書を引用した後には次のように述べられる。

We shall find there not only the reason why the pay of the professional woman is still so small, but something more dangerous, something which, if it spreads, may poison both sexes equally. There, in those quotations, is the egg of the very same worm that we know under other names in other countries. There we have in embryo the creature, Dictator as we call him when he is Italian or German, who believes that he has the right whether given by God, Nature, sex or race is immaterial, to dictate to other human beings how they shall live; what they shall do. (pp. 61-62)

Three Guineas 全体が挑発の意図に貫かれているので、このようにその一部を抜き出しても、この作品が全体として持つ力を示すことができないばかりか、かえって引用部分の議論が余りにも唐突に見えて挑発の力を伝え得ないかもしれないが、致し方ない。これらの引用に共通するのは、社会の体制が自己（自国、男性、知識人）中心の思想を育てていること、それらの権力への意志が他者に対する抑圧・苛虐となって現れることを示している点である。またいずれの場合もその論法は、例えば男性の社会的地位を誇示する制服に対する執着と戦争、大学教育と戦争、女性の職場進出に

に読者の眼を向けさせること、ここに挑発的な言説の目的がある。

同様の目的で“chastity”, “adultery”, “prostitution”といった語が、常識的な意味から意図的にずらして用いられる。通常, “chastity”の場合には精神的価値をも意味するにしても、主にはこれらの語は肉体的行為の有無によって道徳的評価を下す語として用いられる。しかもその道徳的評価とは、主に男性の側から女性の身体を規定し、女性を肉体的行為の有無によって社会の内と外に分ける (chaste woman/adulteress, prostitute) ために使われてきた。確かに“adulterer”という男性形は存在するが、社会の下す道徳的評価に内在するダブルスタンダードのために、女性に対しては言わば「肉体の道徳性」がより重んじられたのは否定できない。⁽¹⁴⁾

ところが *Three Guineas* では “the new ideal of mental chastity” (p. 95), “to sell a brain is worse than to sell a body”, “adultery of brain”, “brain prostitution” (以上 p. 108) といった具合に、これらの語は女性の肉体を離れ、個人の思考と言説が権力作用から如何に自由でいられるかの尺度として使われている。ここには、挑発という手段によって女性の精神と肉体を、そして言葉を、社会に支配的なイデオロギーによる規定から解き放とうとする意図が窺えよう。語の通常の意味を無効にすることによって、それらの意味に潜むイデオロギーを前面に引っ張り出す。そこで読者の常識は揺さぶられ、その依って立つ場を省みるよう促されるのである。

先の例に限らず、*Three Guineas* は意外なものの組み合わせに満ちている。

What connection is there between the sartorial splendours of the educated man and the photograph of ruined houses and dead bodies? Obviously the connection between dress and war is not far to seek; your finest clothes are those that you wear as soldiers. (p. 25)

For do they not prove that education, the finest education in the

名の女性として機能し⁽¹³⁾、その女性は客観的に社会を分析できる存在としてではなく、社会の制度や人々の考え方について次々と疑問を抱き、そのひとつひとつについて考えてゆく人物としてある。その「私」には当然「真理」を語る権威など付与されてはいないし、公正無私のポーズがとられることもない。

そのように限定された機能を持つ「私」の、思考過程の形をとって表わされるのが *Three Guineas* なのである。その過程の中で「私」は読者の意表をつく角度からの分析を行ない、読者の予期しないところに類似性を見出す。愛国心に対する考察もその一つである。また St. Paul が “chastity” について語った言葉に対する分析も、その顕著な一例となろう。次の引用部分では、彼の言説はナチの思想との間に共通性を見出される。

Also he was of the virile or dominant type, so familiar at present in Germany, for whose gratification a subject race or sex is essential. Chastity then as defined by St Paul is seen to be a complex conception, based upon the love of long hair; the love of subjection; the love of an audience; the love of laying down the law, and, subconsciously, upon a very strong and natural desire that the woman's mind and body shall be reserved for the use of one man and one only. Such a conception when supported by the Angels, nature, law, custom and the Church, and enforced by a sex with a strong personal interest to enforce it, and the economic means, was of undoubted power. (p. 187)

教会・社会制度・法などによって権威を付与され、男性側の利害によって強化された St. Paul の言葉の影響力が指摘される。ここで問題になっているのは単に St. Paul 個人の思想ではない。言説と権力の結びつきが、そしてその結合の社会に及ぼす影響力が問題にされているのである。

St. Paul とナチの独裁者という、一見冒瀆的な比較を行ない、両者の間に共通性を見出すことによって常識的価値観を支えるイデオロギーの存在

のが、Rachel Bowlby も指摘するように “an answer” ではなく、“its answer” であるところが大いに皮肉である。⁽¹⁰⁾ そのように彼が自ら “pen” によって安全な場所に囲い込んだ (“pen”) のは、刺激的な、或いは挑発的な思考ではなく、羊のように飼いならされた結論である。恐らく彼の生み出す言説は、「中立的読者」にいちいち “that is true” と相槌を打たせるだろう。そして議論は、著者と読者の双方があらかじめ予測できる軌道上を進み、予測され得る結論に到達するだろう。Bowlby が *A Room of One's Own* に表わされた女性の言説について語る次の言葉は、そのまま *Three Guineas* の言説にもあてはまると思われる。

Where he proceeds and processes along rigidly defined lines, the female narrator has the liberty, as well as the difficulty, of being without a fixed enclosure for writing—a pen of her own.⁽¹¹⁾

A Room of One's Own の語り手は女性に関する書物の山に目を通し、女性についての相矛盾する意見を目のあたりにして混乱する。正当と見なされる言説によって客観的真理と見なされるものを捉えることができずに、“truth had run through my fingers” と嘆く語り手が、そこで男性による女性論の典型として示すのが、Professor von X. という学問世界の権威を代表する人物の著書である。⁽¹²⁾ ここに示唆されるのは、権威を与えられた言説が、客観的知を伝達するという仮装の下に、知を権力と結びつけるために機能するという洞察である。*Three Guineas* において視点の移動による既存社会の見直しという姿勢が貫かれるためには、そのような権力と結びついた言説も、科学的客観性を装いながら実はイデオロギー的言説であるという欺瞞も否定されねばならなかったのである。

そこでまず、*Three Guineas* において語る主体の権威づけがどのように避けられているかを見てみよう。ここで語る主体である「私」は全ての読者を代表するものでもなければ、全ての女性を代表するという暗黙の了解を得ようとするものでもない。「私」が生活環境と歴史を共有するのは “educated men's daughters” であると最初に規定される。その後も「私」は、作者 Virginia Woolf その人ではなく、知識人階級に属する匿

議論によって「これは真理である」と読者を説得するのは不可能である。そもそもイデオロギー的言説が正／誤，真理／虚偽といった二分法の論理によって成立し得ると考えること自体に誤りがある。ではそのような科学的実証性を備えた言説であり得ないとすれば，読者に視点の移動を促すための言説はどのようなものであるのか。その性質を一言で呼ぶならば，挑発的言説ということになろう。読者の視点の移動させるために，読者にへつらうのでもなく，客観的真理を語る権威をもって説得するのでもない。読者を挑発し，その常識を攪乱することによって，読者を覚醒へと導く方法を取るのである。

何しろ視点の移動は過激な行為であり，それに対して社会が，そして読者が自らの回りに張り巡らせた常識の壁は厚い。客観性・普遍性を装った言説によって，全ての読者の抵抗を解除しようとするれば，Nicolsonの言う「中立的読者」，即ち常識で身を固めた読者にとって安全な思想へと品質低下（“adulterated”）させることになるだろう。それは *Three Guineas* の中で是非とも避けねばならぬこととされている（pp. 104–109）。

Three Guineas より9年前に発表された *A Room of One's Own* も，権威に裏打ちされた言説についての洞察に満ちている。中でも次の一節は，「中立的読者」と「客観的真理」の神話を皮肉によって解体していると言えるだろう。

The student who has been trained in research at Oxbridge has no doubt some method of shepherding his question past all distractions till it runs into its answer as a sheep runs into its pen.⁽⁹⁾

この部分の設定では，大学教育を受けていない女性の語り手が，自分は思考を系統的に組み立てられないのに，大英博物館の図書室で隣の席に座っている男子学生は時間を有効に使って知的収穫を得ているとして，表向きは自らを卑下している。しかし実は，既成の大学教育を賞揚しているわけでは毛頭ない。研究のための思考訓練を受けた男子学生がここで到達する

理だ」と判断し、その彼又は彼女の判断が客観的判断に等しいような読者、そんな「中立的読者」の神話がここでは信奉されているのである。

それでは「中立的読者」が「真理」と判断する、その「真理」とは本当に客観的真理であり得るのか、考えてみなければならない。客観性が完全に獲得できる言説とは、突きつめていけば、全く単純な文構造を持つ短文でしかなくなるのではないだろうか。どのような言説も、語句の選択の仕方、配置の仕方、レトリックの用い方、更にはそれが発せられる時と場所によっても、読み手（または聞き手）のひとりひとりに対して与える効果は変わってくるのだし、また読み手の立場や、それを読む時と場所（時代と国）によって語句や文のレベルから言説全体に至るまでの理解の仕方は異なるはずである。そう考えてゆけば、短い文でさえも、そこに潜むイデオロギーを問題にする場合には、どんな読者にも同じ効果を与えるものか怪しくなってくる。

例えば前章で問題にした最高裁長官の演説にある一文“Englishmen are proud of England”についても、その読者に与える効果はひとつではない。読者または聞き手がイギリス人か否か、愛国主義者か否か、男か女かによっても、この一文に自ら誇りを感じて同意するか、冷淡な眼を向けるか、苦々しく思うか、反応は様々であり得る。また女性の中でもMarlowの叔母のように男性中心社会の言説を共有する者と、それに疑問を持つ者との間では、反応に違いがあるだろう。

このように、“Englishmen are proud of England”という短い一文でさえも、読者の反応は一様ではないのである。その中で、この一文を話し手が意図した通りに理解して、「これは真理である」と判断する「中立的読者」とは、この場合最高裁長官と同様のイデオロギーを持った読者に限られるということになるだろう。

第1章で述べたように、*Three Guineas*の言説が目的とするのは視点の移動である。読者に視点の移動を促すためには、まず社会に広く受け入れられ読者の内にも既に常識化して組み込まれているイデオロギーの存在を読者に意識させなければならない。これは非常に難しい作業であるし、読者の協力がなくては実現できない。その読者の協力をどのようにして得るか。常識的価値観を転倒させようとするこの書が、「論駁の余地のない」

に立って物を見ているかを一度顕わにしようとするものである。

視点の移動は、権力によって絶対的正当性を付与されている既存の思想を異化し、それらの思想を担っている言説を再検討するよう導く。常識的な思考回路に楔を打ち込んで中断させ、その回路の成り立ち自体を思考の対象とし、その成り立ちの過程を省みるように仕向けることが目的なのである。それゆえ、ヴィクトリア朝時代の女性の置かれた状況を議論の中心に据えることは時代錯誤であるとする Nicolson たちの批判は、イデオロギーの成立過程を省みるために必要な歴史的視野の重要性を理解しないことから出ていると思われるのである。

第2章 挑発という戦略

常識化されて見えにくくなっているイデオロギーの存在に読者の眼を向けさせるために用いられるべき言説は、どんなものでなければならないか。ここでより詳しく *Three Guineas* の言説の性質について論じたいのだが、その前にまず、その言説に対する批判に耳を傾けておこう。同じく Nicolson からの引用が批評家たちの批判を代表してくれるだろう。

She lacked and even despised the means that would have helped her to convince the neutral reader, the technique of irrefutability, the ability to make him react constantly, "That is true". Her argument was weakened by inconsistency, incoherence, selective quotation and abandoned trails.⁽⁸⁾

ここで Nicolson が言う「中立的読者」とはどんな読者なのか。そしてその読者によって「真理」と認められる、その「真理」とは何だろう。そもそも読者とは、そして特に *Three Guineas* のような社会的政治的問題を扱ったテキストの読者とは、例外なく歴史・文化・社会上の様々な要素から成り立ったテキスト解釈のコードを内蔵しているものであろう。とすれば「中立的読者」とは、常識として受け入れられている社会のイデオロギーを判断の基準とする読者に過ぎないのではないだろうか。にもかかわらず、何の先入観も持たない読者、「論駁の余地のない」言説を「これは真

Guineas について論じている。その論じ方は、書簡集の編者としての立場を逸脱しているのではないかと案じられるのだが、その点はさておき、ここでは Nicolson の批判の内容を検討しておこう。

But what would have happened, in the context of the 1930s, if the money had not been spent, the arms not used? In reply Virginia took refuge in nonsense, in saying that no appeal can be made to women to contribute to their country's defence, as their country had done nothing for them in return. "If you insist upon fighting to protect me, or 'our' country, let it be understood soberly and rationally between us that you are fighting to gratify a sex instinct which I cannot share; to procure benefits which I have not shared and probably will not share". All women, in fact, should regard themselves as stateless until men cease to make war, for whatever reason.

It was at this point that she lost her audience. Her argument was neither sober nor rational.⁽⁶⁾

She was describing a world which had evaporated, but which to her was still real. She who had won free of it so young, so defiantly, so successfully, was almost alone in imagining that nothing had basically changed.⁽⁷⁾

Three Guineas を具体的な行動提起を促す書と捉えるならば、その内容は歴史上実際に起こったことに照らして何とも実現の可能性を欠いた提案として片付けられてしまうだろう。Nicolson は、"took refuge in nonsense" という表現からもわかるように、*Three Guineas* の言説を非現実的戯言と見なしている。しかしこの書が促すのは非現実的な反戦活動ではなく、視点の移動なのである。そして問題にするのは「愛国主義」、 「正義のための戦い」、 「我が国こそ自由の砦」といった表現に潜む排他主義であり、まず足元から見つめ直して自分たちがどのようなイデオロギーの上

conspiracies that sink the private brother, whom many of us have reason to respect, and inflate in his stead a monstrous male, loud of voice, hard of fist, childishly intent upon scoring the floor of the earth with chalk marks, within whose mystic boundaries human beings are penned, rigidly, separately, artificially; where, daubed red and gold, decorated like a savage with feathers he goes through mystic rites and enjoys the dubious pleasures of power and dominion while we, 'his' women, are locked in the private house without share in the many societies of which his society is composed. (p. 121)

ここで使われている“you”は男性を，“we”は女性を表わす。ここでは声高にスローガンを叫び、拳を振り上げる像へと膨れ上がった男の姿が、ファシズムを象徴すると同時にイギリス帝国主義と父権制社会をも象徴する。人々を閉じ込めたのは何も当時出現しつつあったナチの強制収容所だけではなく、お膝元のイギリスにおいても他民族を抑圧的に支配してきたのである。そればかりではなく自国の内でも長い歴史を通じて閉じ込められてきたのが女性である。この点から、ファシズムとイギリス社会は分離して考えるべきものではなく、双方が支配への意志に貫かれていることが指摘される。人々を集団的狂気へと駆り立てる社会が、当時のドイツとイタリアに起こった特殊な現象ではなく、イギリス社会の構造も同じ根を持っていることが強調されるのである。この見地は、社会での立場において潜在的加害者になる者の自己正当化へ動く心理に対する深い洞察に満ちている。しかし当時のイギリス知識人の多くがファシズムを敵視し、防衛する側の立場で潜在的被害者の意識をもって現状を見ていたのは想像に難くない。それゆえイギリス社会とファシズムに共通性を見出す *Three Guineas* の視点を彼らが共有できなかったのも無理からぬことかもしれない。

しかし当時の知識人の反応はともかく、比較的最近にも *Three Guineas* の議論の妥当性を問題にする批評がある。Woolf の書簡集を編集した Nigel Nicolson は、その第5巻の序文でかなりの紙幅を費やして *Three*

その最高裁長官の言説の対極に位置すると考えられるのが次の一節である。

...the outsider will say, 'in fact, as a woman, I have no country. As a woman I want no country. As a woman my country is the whole world.' (p. 125)

美しい表現である。そしてこれが、Marlow の叔母のように男性中心社会のイデオロギーに囚われることをやめた時に現代の Antigone たちによって見出されるべき法なのであろう。だが対独防衛キャンペーンの最中にこんな事を言ったら、Quentin Bell が行なったような批判を浴びせられるのは容易に想像できる。

What really seemed wrong with the book—and I am speaking here of my own reactions at the time—was the attempt to involve a discussion of women's rights with the far more agonising and immediate question of what we were to do in order to meet the ever-growing menace of Fascism and war. The connection between the two questions seemed tenuous and the positive suggestions wholly inadequate.⁽⁵⁾

この Bell の批判は、女性の問題とファシズムとが全く別の問題だという考えに基づいている。しかしその考えこそ *Three Guineas* が疑問を突き付けたものなのである。

Inevitably we ask ourselves, is there not something in the conglomeration of people into societies that releases what is most selfish and violent, least rational and humane in the individuals themselves? Inevitably we look upon society, so kind to you, so harsh to us, as an ill-fitting form that distorts the truth; deforms the mind; fetters the will. Inevitably we look upon societies as

別についての言葉は、Creonの、そしてここでは政治家、社会学者、大司教によって代表される知と権力の中心にいる者たちの言説には欠落している視点からの言説であるがゆえに、権威者の言説に劣らぬ価値があるとされる。CreonとAntigoneを持ち出すことによって *Three Guineas* が行なっているのは、読者に視点の移動を促すことであり、さらには、Antigoneが自ら従うべしと信じた法に従ったと同様に、現代のAntigoneたちも、多くのCreon的抑圧にもかかわらず、女としての自らの法を発見すべきだという挑発である。社会の周縁に位置する者として “daughters of educated men” は次のような疑問を発しなければならない。

... she will ask herself, ‘What does “our country” mean to me an outsider?’ (p. 123)

She will inform herself of the position of her sex and her class in the past. She will inform herself of the amount of land, wealth and property in the possession of her own sex and class in the present – how much of ‘England’ in fact belongs to her. From the same sources she will inform herself of the legal protection which the law has given her in the past and now gives her. (p. 124)

そして結局のところ、

All these facts will convince her reason (to put it in a nutshell) that her sex and class has very little to thank England for in the past; not much to thank England for in the present; while the security of her person in the future is highly dubious. (Ibid.)

最高裁長官が口にした “liberty” を女は分かち持たず、帝国主義の威容を誇る城は女に属さず、 “bless” されたのは女たちではないことがここに到ってはっきりと確認される。

を見ることが難しかったか、それゆえ結果として彼女たちの言説が如何に父権制社会の権力構造を擁護する価値観を反映しているかを、今日の読者に伝えてくれるからだ。

ここで Marlow の叔母の言葉に見出されるイデオロギーは、先の最高裁長官の演説に通じる。共通するのは、他者の他者性を認めない考え方であり、自己（自国）中心的価値観への盲信とその他者への強制である。そしていずれの場合にも、それを異化する視点が持ち込まれることによって、権力と言説の関係が浮かび上がってくるのである。

また *Three Guineas* には Sophocles の *Antigone* への言及が何度もあるのだが、それは上述の Marlow の視点や “educated man’s sister” の視点同様、*Antigone* に権力者の言説を異化する視点を代表させているからである。

Creon と *Antigone* の間には様々な象徴的対立を読み取ることが可能であろうが、⁽⁴⁾*Three Guineas* において強調されるのは、Creon の抑圧的行動の根本が *Antigone* の他者性を認めないことにあるという点である。即ち Creon は、自らが信奉する国家原理とは異なった原理によって *Antigone* が思考し行動していることを許容しない。

Consider Creon’s claim to absolute rule over his subjects. That is a far more instructive analysis of tyranny than any our politicians can offer us. You want to know which are the unreal loyalties which we must despise, which are the real loyalties which we must honour? Consider *Antigone*’s deistinction between the laws and the Law. That is a far more profound statement of the duties of the individual to society than any our sociologists can offer us. Lame as the English rendering is, *Antigone*’s five words are worth all the sermons of all the archbishops. (p. 94)

Antigone の “five words” とは、後注にある英訳によれば “’Tis not my nature to join in hating , but in loving” である (p .190)。 *Antigone* による真の忠誠と権力に対する忠誠との区別、真の法と権力が課す法との区

できるテキストがある。次に掲げるのは *Heart of Darkness* からの一節で、Marlow が就職のために尽力してくれた叔母と話している時、叔母が彼のことをまるで「文明の光を運ぶ伝道者」のように見なしていることを知って、愕然とするところである。

It appeared, however, I was also one of the Workers, with a capital—you know. Something like an emissary of light, something like a lower sort of apostle. There had been a lot of such rot let loose in print and talk just about that time, and the excellent woman, living right in the rush of all that humbug, got carried off her feet. She talked about ‘weaning those ignorant millions from their horrid ways,’ till, upon my word, she made me quite uncomfortable. I ventured to hint that the Company was run for profit.⁽³⁾

ここには、当時のヨーロッパ人の多くが植民地に対して抱いていた感情が帝国主義的言説によって管理・操作されていたという、言説の社会的機能に対する鋭い洞察がある。アフリカで活動するヨーロッパ人は、無知な民に文明的な生活を指導する使命を担っているという、当時支配的であった植民地観によって、叔母の意見は形成されたのである。叔母の、“weaning those ignorant millions from their horrid ways” という表現がわざわざ引かれているのは、それが巷にあふれていた植民地政策に関する言説の受け売りであることを示すものであろう。それに対して Marlow の「会社は利益追求のために運営されている」という指摘は、自明のことであるはずなのにイデオロギーの管理操作によって見えにくくされている植民地政策の実体を言い当てている。

実は *Heart of Darkness* では、このすぐ後に「女ってのは何て真実からかけ離れた所に生きているんだ」という Marlow の感慨が続くのだが、この如何にもヴィクトリア朝的女性観を、Marlow の女性に対する狭隘な見方の現れであると簡単に片付けることはできない。なぜなら、Marlow の言葉は父権制社会の中で女性が如何に現実から隔離され、自分の眼で物

That is a fair general statement of what patriotism means to an educated man and what duties it imposes upon him. But the educated man's sister—what does 'patriotism' mean to her? Has she the same reasons for being proud of England, for loving England, for defending England? Has she been 'greatly blessed' in England? History and biography when questioned would seem to show that her position in the home of freedom has been different from her brother's; and psychology would seem to hint that history is not without its effect upon mind and body. Therefore her interpretation of the word 'patriotism' may well differ from his. (p. 12)

つまり *Three Guineas* の視点から先ほどの演説を読めば次のようになるだろう。まず、演説の発話者ほど「自由」がしっかり根づいているとは信じられない女性その他の周縁に位置する者にとって、英国は城などではなく、またたとえ城であるにしても、またその城が何を象徴するにしても、女はその外に締め出されているか、或いは内に幽閉されているに過ぎない。それゆえ誇りに思い、愛し、身を賭してまで守るべき価値を「城」に見出すことはできない。故に“Englishman”は神の栄光を受けていると感じられても、“Englishwoman”にはそう感じられない。テキストの視点に読者の視点を合わせるならば、最高裁長官のありふれた愛国主義的演説は、以上のように解体されるのである。

この“educated man's sister”の言説は、男性の持つ権力に対するひがみを表わすものではない。彼女の視点は演説の中で当然の如くに語られている自国中心の価値観を疑問視する。他国を判断するのに自国の基準をもってするのは、他国をありのままに受け入れようとしない態度であり、それは想像力と共感の欠如に起因する。テキストは、この権力によって当然の如くに行なわれていることに対して皮肉な光を当てる。しかも他者を裁く立場にある最高裁長官の言葉としてその思想が語られるのは二重の皮肉であり、滑稽な中に権力の孕む抑圧と排除の可能性を顕わにしている。

ここで愛国心についての *Three Guineas* の視点に重ね合わせることの

な機能に対する意識を高揚させる必要があるとする認識は、まさに Woolf に *Three Guineas* を書かせた動機でもあり、その中に示された見地に通じるものである。と同時にこの認識は、本稿において *Three Guineas* を論じる際の前提となるものでもある。

Three Guineas では、教育・労働・宗教・愛国心などについて、社会の中心にいる者の言説が、周縁にいる者の見方によって次々と解体されていく。

一例を挙げよう。愛国主義的言説の例として引用された最高裁長官の演説は、元は彼の信条を分かち持つ聴衆に向けて発せられたものだが、ここではその文脈からはずされ *Three Guineas* のテキストに組み込まれることによって、その誇り高い意気揚々とした調子が皮肉な照明の下に色褪せ、逆に話し手の偏狭さが滑稽なまでに露呈する。*Three Guineas* に引用された通りにここに引いておこう。

Englishmen are proud of England. For those who have been trained in English schools and universities, and who have done the work of their lives in England, there are few loves stronger than the love we have for our country. When we consider other nations, when we judge the merits of the policy of this country or of that, it is the standard of our own country that we apply.... Liberty has made her abode in England. England is the home of democratic institutions.... It is true that in our midst there are many enemies of liberty—some of them, perhaps, in rather unexpected quarters. But we are standing firm. It has been said that an Englishman's Home is his Castle. The home of Liberty is in England. And it is a castle indeed—a castle that will be defended to the last.... Yes, we are greatly blessed, we Englishmen.⁽²⁾

この演説に対して、次のような“an educated man's sister”の視点が持ち込まれる。

挑発する言説—— *Three Guineas* における 言語について

野 口 祐 子

序 論

Virginia Woolf の *Three Guineas* は社会構造の見直しを目的として書かれた。このテキストは、暗黙のうちに広く受け入れられている権力、因習、差別の意識に疑問の眼を向ける。その際にそれらの意識を支えるべく社会に行き渡っている言説や知識が果たす社会的機能に対して、特に注意が向けられる。それと同時に、このテキスト自体が一つの言説として果たすべき機能についても多大な配慮がなされていると思われるのである。そこで、ここでは *Three Guineas* において追求される、社会とイデオロギーと言説の機能との間に成立する関係について論じてみたい。

第1章 視点の移動による既成概念の解体

Language and Power という著書の中で Norman Fairclough は、言説と権力の関係を論じるこの著作の執筆動機を、次のように述べている。

... one of my purposes in writing [this book] was to help increase consciousness of how language contributes to the domination of some people by others, because consciousness is the first step towards emancipation. That consciousness of language in particular is a significant element of this 'first step' follows from the way domination works in modern society: it works, as I have been arguing increasingly through 'consent' rather than 'coercion', through ideology, and through language.⁽¹⁾

ここに見られる、権力の維持がイデオロギー操作によってなされ、言語がその重要な手段となるという認識、さらに、それゆえにこそ言語の社会的